認定医ケースプレゼンテーション抄録

上顎多数歯欠損にパラレルミリングとコーヌスクローネを応用した1症例

熊谷 宏

A Case of Parallel Milling and Conus-Crown for Upper Partially Edentulous Patient

Hiroshi Kumagai

I. 症例の概要

上顎の多数歯欠損で前歯部が残存している場合、パーシャルデンチャーの維持装置を前歯部に設定せざるをえないので、審美的な問題が生じる場合が多い。審美性が良好で、リジッドサポートが達成可能な支台装置として、非緩圧型アタッチメント、パラレルミリング、コーヌスクローネ¹⁾などが用いられてきた。

今回、上顎多数歯欠損にパラレルミリングとコーヌスクローネを応用し、10年経過した症例について報告する。

患者：59歳，男性。

初診：昭和63年5月。

主訴：上顎部分床義歯不適合による咀嚼障害。

現病歴：残存していた4321|137のうち、321|7は骨植良好であったが、4|13は重度の歯周疾患により動揺著明であった。321|はいずれも広範囲に及ぶレジン充填が施された失活歯で3|根尖相当部にはフィステルが認められた。7|クラウンマージン部には二次カリエスが認められた。

下顎は764~46残存で、7⑦⑥5|、④5⑥部にブリッジが装着されており、7|は欠損のまま放置されていた。口腔清掃状態は不良で、全顎にわたり歯肉炎が認められた。

II. 診断と治療方針

上顎部分床義歯不適合および4|13の動揺による咀嚼障害と診断し（最終的に抜歯）、残存歯の歯周治療および上顎部分床義歯再製作を行うこととした。

321|7を支台とする部分床義歯の設計にあたり、支台歯である321|が唇側に傾斜していること、前歯部は固定性補綴物にしたいという患者の希望を考慮して、321|には舌側部にパラレルミリングを施した連結メタルボンドクラウン、7|はコーヌスクローネとした。欠損部にはType IV金合金パーシャルデンチャーを装着した。

III. 治療内容

初診時に使用していた義歯は著しい不適合のため、まず765|2456に治療用義歯を製作し、321|7根管治療、Type III金合金による支台築造を行った。4|13は歯周治療にもかかわらず症状が改善されないため抜歯した（平成元年5月）。

前歯部の連結メタルボンドクラウン製作にあたり、123欠損部に人工歯仮配列を行うことにより123|との調和を図った。

パーシャルデンチャーの維持装置による審美障害および321|が唇側に傾斜していることを考慮して、クラウン舌側部にパラレルミリングを行った。その際、ミリングの着脱方向と7|コーヌスクローネ内冠の遠心面とをパラレルに設定した（図1）。

広島大学歯学部口腔機能修復学講座（主任：濱田泰三教授）
Department of Prosthetic Dentistry, Hiroshima University
Faculty of Dentistry (Chief: Prof. Taizo Hamada)

図 1 321 metal-ceramic crown and 7 internal crown
321 メタルボンドクラウンと 7 内冠

図 2 Insertion of upper denture
上顎義歯装着

図 3 Intraoral view, 10 years after insertion of upper denture
上顎義歯装着 10 年後

欠損部には Type IV 金合金パーシャルデンチャーを装着した。31には審美性を考慮して、欠損側頬側隅角付近に Type III 金合金による I バーを付与した (図 2)。

以上の設計により、平成元年 12 月に最終補綴物を装着した。

IV. 経過観察と考察

321部は歯軸とミリングの着脱方向の相違が大きいため、クラウンがオーバーカントゥアとなり、清掃性に問題があったことに加え、患者のプラークコントロールも良好とはいえなかった。そのため、義歯調整が終了した後も、当初の 2 年間は 1~2 カ月おきに、その後も半年おきにリコールを繰り返したところ、義歯の維持安定、残存歯の骨植状態はいずれも良好のまま推移した。

平成 8 年 6 月に下顎臼歯部に歯周疾患の悪化が認められたため $\overline{76d|6m}$ (m: 近心根, d: 遠心根) を抜歯した。上顎最終補綴終了以来、約 7 年にわたるリコールにおいて、咬合状態は良好に経過してきたことから、上顎の補綴処置と下顎臼歯部の歯周疾患増悪との間に直接的な因果関係は考えにくいと思われる。し

かしながら、リコールにおける歯周組織の全顎的メンテナンスをより確実に行えば、下顎臼歯部がより長期的に保存できた可能性も否定できず、リコールのあり方について反省点を残した。抜歯後は、下顎歯冠補綴物再製、Type III 金合金によるパーシャルデンチャー製作を行った。その間上顎については、6部人工歯咬合面に破折が生じたので、同部を Type III 金合金に置換した。それ以外は良好な経過であり特に問題は生じなかった。

平成 11 年 12 月に、患者が全身疾患にて体重が急激に減少したため義歯不適合を訴えた。顎堤吸収による粘膜面不適合がみられたため、リライニングを行った。本症例は、義歯装着後約 10 年にわたり義歯の維持装置と支台歯との適合性、維持力、また粘膜面の適合性は良好であった。一方、321メタルボンドクラウンの形態について、清掃性の観点から問題があったと思われる。義歯装着以来継続した定期的なメンテナンスにより、幸いにも歯周疾患の悪化はみられなかったものと思われる (図 3)。

文 献

- 1) 五十嵐順正. 支台装置の選択と義歯の動揺. 補綴誌 43: 406-414, 1999.